

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
しー10	<p>梔子柏皮湯</p> <p>弁陽明病脈証併治第八第 83 条 (傷寒論)</p> <p>「傷寒、身黄発熱する者は、梔子柏皮湯之を^{つかさど}主る。」</p> <p>解説 傷寒に罹って、身体が黄色くなって熱を發する者は、梔子柏皮湯が主治する。同じ湿熱による黄疸でも、發熱があつて、無汗であるが、熱邪が湿より比重が重く湿が軽いので、湿熱として裏に鬱積しないので腹滿は無く、小便不利のことが多い。また發熱のために、少し胸苦しくて、軽い口渴も見られる。これらは湿熱が三焦に停滯していることによって生じるもので、梔子柏皮湯を用いる。この様な状況の黄疸は、茵陳蒿湯を投与した後で、未だ余熱が残った時にも見られる。</p> <p>梔子は三焦に停滯している熱を小便で排出する。黄柏は清熱燥湿し、甘草は和中健脾で、梔子・黄柏の苦寒の性質が胃を損傷するのを抑制する。</p> <p>「方劑決定のコツ」の注釈</p> <p>梔子柏皮湯は、傷寒を病むうちに傷寒の邪熱が太陰の經に及び、熱が表に集まるために、身黄発熱の証を現わしたものである。</p> <p>茵陳蒿湯は、邪熱が外に甚だしくて、体液が下に泄れないため小便不利、腹微滿を生じるが、梔子柏皮湯は、身黄、發熱を主どる薬方であるから、内外の熱は茵陳蒿湯に比べれば弱いと言える。薬方から考えても、茵陳蒿の苦平と、甘草の甘平との相違と、大黄と黄柏との相違がある。</p> <p>梔子柏皮湯証</p> <p>黄疸で、手足がほてるように熱し、夕方になると熱が高くなる時に用いる。口渴、少し胸苦しいなどがみられる、無汗、小便不利、腹滿はない。</p> <p>参考 黄疸に対する対応 茵陳蒿湯は、瀉熱で、湿熱黄疸を瀉下退黄する。 梔子柏皮湯は、清熱で、清化退黄する。 麻黄連軀赤小豆湯は、散熱で、解表退黄する。 茵陳四逆湯は、寒湿黄疸を温化退黄する。 抵当湯は、瘀血黄疸を逐瘀退黄する。</p> <p>胃家（胃、小腸、大腸）の熱の程度が軽い時は、手足がほてり出し、内実まで進むと手足に汗が出る。梔子柏皮湯は、この病理を応用してほてるように熱して、痒い皮膚病に用いる。</p> <p>梔子柏皮湯証</p> <p>新古方薬囊によれば「黄疸病にて發熱する者、身体がむしむしと熱くして煩する者。」と記されている。</p>	<p>梔子 (苦寒) 1.5g ・ 甘草 (甘平) 1g ・ 黄柏 (苦寒) 2g</p> <p>上の3味を水 160ml を以て煮て 60ml となし、滓を去り 2 回に分けて温服する。</p>